「忠臣蔵三百年」48番目の義士

萱野三平重實⑥

近松勘六の妻

主君浅野内匠頭を亡くした赤穂藩には約300人の藩士がいましたが、実際に討ち入りに加わったのは46人（寺坂吉右衛門を含めて47人という説もある）ですから、250人余りの旧赤穂藩士（浪士）は行動を別にしました。

そのなかには、大石内蔵助と意見が合わずに対立し、赤穂から立ち去った家老の大野九郎兵衛、仇討ちの急進派でありながら途中で盟約から脱退した、槍の使い手として有名な高田郡兵衛、内蔵助の親戚でありながら討ち入りの5ヶ月前に姿を消した組頭の奥野将監などが知られています。

彼らは、歌舞伎・映画・ドラマ・書物のなかで「卑怯者、不忠義者」と非難を受け、本人の弁解が許されないまま今日までその名前を残していますし、討ち入りに加わらなかったにも関わらず、萱野三平の名前もまた伝えられています。

良くも悪くも歴史の一ページに名前を残している人々がいる反面、300年の長い年月は、数多くの事件関係者を忘れさせてしまったのも事実です。その一つの例として、箕面にゆかりのある一人の女性を紹介します。

萱野村に赤穂浪士の妻になった女性がいたことは、みなさんご存知でしょうか。元禄のころには、萱野村の多くの人々が、三平と同じようにこの女性のことを知っていたことでしょう。しかし、三平が郷土の誇りとして今日まで顕彰されてきたことに反して、赤穂浪士の妻であった一人の女性の存在は、長い年月の間に忘れ去られてしまっていたようで、これまでの間何も伝えられていませんでした。

ところが、平成6（1994）年のある日に、滋賀県野洲郡中主町から赤穂浪士四十七士の一人である「近松勘六」の子孫であるというご夫婦が、郷土資料館に来館されました。箕面に来られた理由をお聞きしたところ、『近松家に伝わる古文書の中に、「勘六が討ち入り前に、病弱の妻を、摂津国萱野村に帰した」という文書が残されているので、萱野のどこかにその墓があるはずで、その墓を捜しに来られた』ということでした。

萱野の藤井家から、勘六に嫁いでいたことがわかっていましたが、名前が不明でしたので、結局その墓を探し出すことはできませんでした。この女性の存在が判明したことにより、さらに重要な事実が浮かび上がってきましたが、その内容については次号でご紹介します。

▲近松勘六直筆の手紙の一部

8月1日にNHKテレビの大河ドラマ『元禄繚乱』で「三平の切腹」の場面が放映されるとともに、終わりの「元禄紀行」で三平が切腹した長屋門が紹介されたことにより、萱野三平記念館「涓泉亭」には、近隣・遠方を問わず連日多くの歴史ファンのかたが訪れました。特に土・日曜日には、見学者が100人を超える日がたびたびあり、改めて「赤穂浪士」の人気やマスコミの影響力に驚いています。